言葉を用いた革命の試み

東北学院大学　小宮友根

1. はじめに

本報告の目的は、当事者／非当事者という区別を用いておこなわれる議論について、とりわけ「宣言」と呼ばれる行為を題材にしながら、その区別がどのような線引きであるのかを理解するための比較の視座を与えることである。シンポジムの趣旨文にあるように、当事者／非当事者という区別は社会的世界を分節化する。しかし、その分節化はいったいいかなる営みなのだろうか。

2. カテゴリーの「自己執行」という視点

ひとつの補助線として、H. サックスが「ホットロッダー」という論考の中で提示している、カテゴリーの「自己執行」という視点を導入しておきたい（Sacks 1979）。この論考の中で、サックスは言葉を用いた「革命」の方法に触れている。サックスがいうには、改造車に乗ってレースをする若者たちは、自分たちのことを「ホットロッダー」というカテゴリーのもとで理解し、「ティーンエイジャー」というカテゴリーのもとで理解されることに抵抗していた。なぜなら、「ティーンエイジャー」とは「大人」から若者に対して適用されるものであり、そこではふつうの車に乗りレースなどしない、きれいな身なりをした若者が「良い」ティーンエイジャーとされるからである。そのカテゴリーのもとでは、かれらは単に素行の悪い「ティーンエイジャー」になってしまう。他方「ホットロッダー」というカテゴリーは、車の種類、改造の仕方、レースへの参加といった、自動車とその乗り方に関する知識や経験と結びついたカテゴリーである。誰がホットロッダーであるのかを決める権利は、ホットロッダーであるかれら自身に優先的に与えられている。そのカテゴリーが「自己執行カテゴリー」であると言われるのはこの意味においてである。この点で、「ホットロッダー」というカテゴリーを用いるとき、若者たちは自分たちが誰であるのかを決める権利を「大人」から取り戻す「革命」に従事している、というわけである。

この議論のポイントは少なくとも三つある。第一に、あるカテゴリー集合の要素であるカテゴリーを用いて人を特徴づけるとき、ある人に対してどのカテゴリーを適用するかを決める優先権のようなものが、その集合の特定の要素のメンバーに与えられている場合があるということ。第二に、ある人に特定のカテゴリーを適用するにあたっては、そのカテゴリーとどのような活動、知識、経験などが結びついているかを、そのカテゴリーを用いる社会成員自身が気にかけているということ。したがって第三に、ある人にどのようなカテゴリーを適用すべきかは、事実としてその人に当該カテゴリーが適用可能かどうかよりもむしろ、さまざまな知識や活動、経験との関連においてその人を評価するという活動の中で決まるということである。

3. 当事者論と宣言論

こうした視点からから本シンポジウムの主題である「当事者宣言」に関する概観することで、いくつかの論点が提示できるように思う。

第一に当事者論の側面に関していえば、誰が当事者なのかという問いは、必ずしもある人が何らかのトラブルを抱えているかどうかという事実についての問いではないことがわかる。たとえば「性同一性障害」という医療カテゴリーをめぐっては、「当事者」のあいだに「真の当事者」をめぐる争いがあった（鶴田 2009）。また、HIV/AIDS については、感染経路の違いが感染者を異なっ

た立場におく（本郷 2007）。こうした問題が示唆するのは、医者に「性同一性障害」と診断されたことや HIV に感染しているという事実よりもむしろ、ある人がどんな活動をしている（していた）か、どんな経験を持つかといった点が問題となっており、そしてそこから、その人に何についてどんな権利や義務、責任がある（ない）のかが争われているということであろう。こうした状況では「当事者に寄り添う」「自分のことは自分で決める」といったスローガンは力をもたない。その前に、「当事者」「自分」という言葉の使用においておこなわれている「人の評価」および権利や義務の帰属実践が分析されなければならない。

第二に、宣言論の側面に関していえば、いくつかの「宣言」はカテゴリーの自己執行の実例となっていると思われる。宣言にはしばしば「定義」が含まれる。ろう文化宣言には「ろう者とは、日本手話という、日本語とは異なる言語を話す、言語的少数者である」と書かれている。また触常者宣言には「触常者とは“考える”人である……触常者とは“交わる”人である……触常者とは“耕す”人である」と書かれている。こうした表現では、「ろう者」「視覚障害者」とカテゴリー化されてきた者が属するカテゴリー集合の転換が試みられている。「ろう者／聴者」のあいだの「聞こえる／聞こえない」という能力上の序列関係は「日本語話者／日本手話話者」という習熟言語の違いに置き換えられ、「晴眼者／視覚障害者」のあいだの「見える／見えない」という関係は「見常者／触常者」という習熟能力の違いに置き換えられる。従来の関係では序列の下位に位置づけられてしまうカテゴリーを新たな関係のもとに再配置するという点で、これらは「革命」の試みとみなせよう。

4. 「革命」の後で

革命というものは成功してからが難しいものである。革命である以上「反対勢力」がおり、恐怖政治がしかれては革命の意義も損なわれかねない。成し遂げた転換をいかに持続的なものとして定着させるかは、革命そのものよりも困難かつ重要な課題でありうる。「言葉を用いた革命」についても、その試みの後で私たちの社会生活に何がもたらされるべきかについて、議論を提起できればと思う。

文献

本郷正武，2007，『HIV/AIDS をめぐる集合行為の社会学』ミネルヴァ書房.

Sacks, H., 1979, “Hotrodder: A Revolutionary Category,” G. Psathas ed., *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, Irvington Publisher.

鶴田幸恵，2009，『性同一性障害のエスノグラフィ』ハーベスト社.